

棕の道草 第2回 「私の吟行地」

亀井千代志

“ 清澄庭園 ”

あまりに出来すぎた日本庭園は苦手である。ライトアップで人が集まる時などはなおさらで、誘われでもしなければ足を運ぶことはない。でも、時々思い出したように、駆り立てられるように庭園に出かけることがある。

昨年9月のある日、ネット検索して、「ここにはまだ行ったことがない」と思い、清澄庭園へ出かけることにした。地下鉄に乗り継いで清澄白河駅へ。駅から門まではほんの少しの距離。こじんまりした窓口で入場料を払って入ってみると、驚いた。この建物、この池、この順路、見覚えがある。これが既視感、デジャ・ヴュか、と思いきや、よくよく考えたら、何のことはない、二回目だったのだ。ここは花菖蒲が有名なので、一年前に、その季節に訪れていたのを思い出した。その時期に比べると、曼珠沙華の盛りのこのときは、落ち着いた雰囲気だ。池周辺の回遊はそこそこに、曼珠沙華の赤や白、黄など、いろいろあるものだなあと思いつつ、歩を進める。

ここのいいところは、歩くのに時間的、体力的にほどよい広さであること、いわゆる庭園らしい空間の奥に、四阿と広場があることだ。ほどよい広さは、急がず、時間を気にせず、立ち止まりながら過ごすことができる。広場は、子どもを遊ばせる家族もいて、句材になる。この日は、ママ友たちが子どもを連れて来ていて、遊ばせていた。何か見つけたらしく駆け出す子、四阿で虫かごをいじる子、母親にぴたっと添って離れない子。頼りない足取りで走る子を、親は声をかけながら追いかける。四阿の子どもは虫かごをはたいて落としてしまい、大騒ぎ。ポーっとしていても、周りではいろんなことが起こるものだ。

ここは庭園だからこそ、外の世界とかけ離れた時間の流れがある。

帰りは、隅田川べりに足を伸ばすのもいい。深川江戸資料館も楽しい。ついでに下町のブラブラ歩きができるのも清澄庭園のよさ。ブラブラして、ポーっとしていられる。清澄庭園と下町吟行は、何とも“ブラボー”である。

幼子を抱き寄せ秋のサングラス 千代志 (『棕』85号掲載)